

沼津市 志 山 小 記 念 館

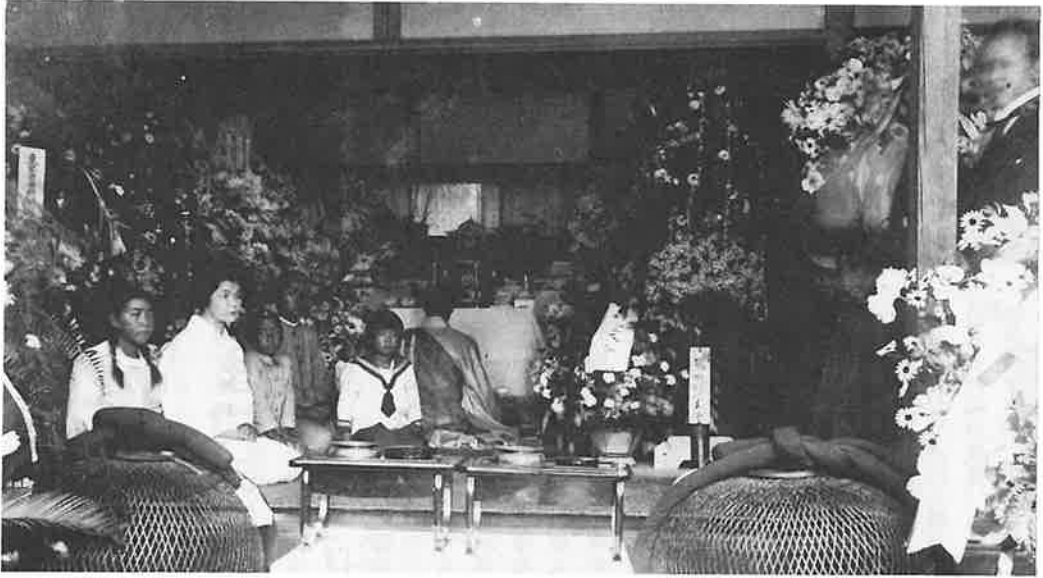
第9號

1992.10.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424



告 別 式 (昭和三年九月十九日)

牧水は昭和三年九月十七日午前七時十八分、千本松原のかたわらの市道の自宅で永眠した。市内在住の医師稲玉信吾博士に看取られ、家族や親しい友人や多くの弟子たちが見守るなか、些かの苦痛の気色も無く、渚の潮の引くような実に静かな臨終だったと言う。病名は急性腸胃炎兼肝臓硬化変症、明らかに長年にわたる過度のアルコール摂取の結果であり、詩歌に関わって生きてきた者の心身の消耗の極致でもあろう。自分の最も愛好したものによって、死へ行き着いた成り行きを思えば、わずか四十三年の存世ではあったが、壮烈とも見える一生だった。

掲出の写真は佐野利夫氏(社団法人沼津牧水会事務長)が友人からいただいたもので、死の翌々日の十九日午後二時過ぎに始まった告別式のスナップである。市内在住の鈴木英夫氏の父君が若い頃撮った一枚で、家内を整理していたらまたまた出てきたものだと言う。これまで親族が仏前に集まった様子や、会葬者全員の記念写真は何度か目にした覚えがあるが、式の実際の状況がそのまま写っている写真は珍しいものである。

写真は左からみさきさん、喜志子夫人、富士人氏、旅人氏、そして真木子さん。右端に立っているのは大悟法利雄氏だという人が居たが確かではない。焼香台脇に置かれた一对の放鳥の籠には、耕文社印刷の社長長沢茂雄氏の名前も見える。

突然一家の支柱を失った遺族の姿は無惨なまでに危うげに見える、おのずから見る人の涙を誘う。思えば喜志子夫人は故郷信州村井駅で、訪れた牧水からいきなり求婚の言葉を聞き、数日後手紙で、「塩尻を立つて以来、私の心をすっかり占領しているのはあなたです」と熱烈な告白を受けたことがある。彼女は間もなく家出をして東京の牧水の元に走ったのだが、それが明治四十五年の春であった。それからわずか十六年、このような逆境に立とうとは想像も出来なかつたはずである。遺骸の前の座つたままや呆然としている喜志子夫人を見ると、写真とは言え思わず胸が苦しくなるのだ。

彼女は後に追悼記の中で「あれでよかったのだ、あれですべてよかったのだ」と夫への想いを述べている。それは多分彼女だけにしか分からない、牧水への最高のほなむけの言葉であったのだ。この頃彼女が作った歌に

形にそふ影とし念じうつそ身を我はや君にささげ来にしを

というのがある。「私はもともとあなたの影になるつもりで生きてきた女です、それなのに何故、影である私だけをこの世に残して一人で逝ってしまったのですか」と、言葉の背後に万斛の無念の想いをにじませている。写真を前にその声を聞くと、人の世の哀れは一層極まる思いがする。

(上田 治史)

沼津が生んだ慟哭の歌人、明石海人の特別展を当牧水記念館ラウンジにて平成四年六月九日から七月五日まで開催し、訪れた大勢の人達に多大な感銘を与えました。今回の特別展の企画、実現に特にお骨折りをいただきました川口和子、八十浜俊一、岡野久代の方から、それぞれの立場からの寄稿をいただきました。

『明石海人文学展』開催までの経緯

川 口 和 子
(社団法人沼津牧水会理事)

昨年(一九九一年)の海人忌(六月九日)は、梅雨季にも拘らず晴天であった。その為もあってか「明石海人を偲ぶ会」には、予想を越えて三十人近くの方が出席して下さった。

海人の従兄弟さんや甥御さんも見えられ、出席者全員が熱心に発言された。

話し合いの結論として、海人の愛した沼津千本松原に歌碑を建てようということになったが、先ず、その前にハンセン病に対する差別と偏見の強かった時代に、病に罹つたために、抹殺されようとした自我を文芸によって開花させ、遂に文学史に残る不朽の作品を発表した明石海人の懸命な人生と業績を、沼津市民はじめ、多くの人々に知ってもらおう為の「展示会」を開こうではないか、と俄かに座が盛り上がった。

その後、沼津牧水会の理事会において、一九九二年度(平成四年)の、牧水記念館特別企画展として『明石海人文学展』を開催することが正式に承認さ

れた。

期間は一九九二年の六月九日(海人忌)から、七月五日(海人誕生日)までの約一ヵ月間、会場は牧水記念館ラウンジと決定した。

しかし、世間に広くアピールするような文学展を開くには、どうすればよいのか。世人の一部に蟠る病に対する偏見を糺しつづ、各階層、各年齢層の人々に理解し賛同していただくには、どのような準備が必要か、前例のない文学展なので、はじめは全く、暗中模索、戸惑うばかりであった。

資料調査に、皓星社の藤巻修一社長の御紹介で、沼津牧水会から八十浜俊一、渡辺和彦、岡野久代、川口和子の四名が岡山県の長島愛生園に伺つた事の收穫は大で、園内の神谷文庫に、海人の推敲のあとのある詩稿や歌稿、スケッチ風な素描や日記、自筆の色紙などが、完全な形で残されていることがわかった。愛生誌編集部の見美智子さん等が、遺品を整理し、しっかりと保管していられたのである。私



は深く心打たれ開催の「志」に確信を得た。

この他にも、文学展にむけて、多くの方々のお協力があつたことは言うまでもないが、五十余年前に亡くなった明石海人の、悲痛な生涯に込めた誠の一念が、現在の私達に働きかけて『明石海人文学展』を開かせたのだ、と思わずにはいられない。



明石海人文学展に関わって

八十濱 俊一
(社団法人沼津牧水会監事)

明石海人文学展の企画に関わる中で、私の目を開かせてくれたのは長島愛生園の方々と海人周辺の方々との出会いであった。それは昨年九月に長島愛生園へ海人のことを調査に行った時に始まった。

Sさんは「病棄て」という著書の中で、「私の言分などなにもなく、声らしい声も残さずに終末することが、らいを病んだ者たちの歴史の終末に似つかわしいと思いたい気持も片方にはある」と述べて、隔離政策の不条理を複雑な思いで受け止めている。今は島には橋も架り自由な交流もできるようになつたとは言え、長い島の生活はSさんをはじめハンセン病を病んだ方々の心に大きな傷を残し重荷となつて知っていることを知った時、私にはどうすることもできないもどかしさを感じた。

Fさんは、島の神谷書庫の管理をされ、また月刊「愛生」の編集者の一人である。島を案内して下さりながら「海人の時代と島の地形は変わっていません。でも人が住まなくなるとすさまじい勢いで自然に帰るものですね」と言っておられた。二十年も経てばハンセン病を病んだ方々は殆んどいなくなることを思うと、Fさんの言葉は重みを増し私の胸に迫るものがある。(入園者の平均年齢六十八・一五歳)

Uさんは全患協の闘士という感じの方で、彼は「乞食をやった人もいるが言わなくなったなあ、前

には自慢する人、ひた隠す人と二つに分れたものだよ」当時ハンセン病になると「家の中に隠すか、乞食をするか、自殺するか三つの道しかなかった」と言っておられた。また「魅つたもうひとつの声」の著者Hさんは、食道発声というハンデを乗り越えて「生きる」とはこういうことなんだ」ということを教えて下さった。Kさんとは心を開いて共に酒を酌み交わすことができた。また、文学展に関わる中で、神谷美恵子女史の著書に接し、女史が初めて愛生園を訪ねた時の詩が私の脳裏から離れない。

運命とすれすれに生きているあなたよ
のがれようとて放さぬその鉄の手に
朝も昼も夜もつかまえられて
十年、二十年、と生きてきたあなたよ
なぜ私たちがなくてあなたが?
あなたは代つて下さったのだ

「人間をみつめて」より
明石海人は、愛生園の方々と私たちを結びつけ、その優れた文学の理解を深める大きな助けとなり、そして神谷女史がハンセン病に関わりその働きを知ること、
「人間とは!」と問いなおす機会を与えられた。明石海人文学展の波紋は深く広く拡がっていくことであろう。

明石海人文学展の展示について

岡野久代

(明石海人研究者)

歌集『白描』は、明石海人文学の傑作であるばかりでなく、病者の歌集の中でも、第一級品として名高いものです。

それゆえ、この文学展の展示は、『白描』を骨子に構成したわけですが、一般の文学展に見られるように、作品や資料の理解を助ける年譜の部分は不本意ながら省かれました。いうまでもなく、明石海人が煩ったハンセン病に対する偏見が配慮されたからです。

しかしながら、未公開の歌集ノート、自筆原稿、遺愛の品など、全国初の明石海人文学展を飾るに相応しいものが出陳されました。

展示は四つの陳列ケースと三方の壁面を使用し、陳列ケースの一つには、原典と関連図書を出版順に配列して、説明を加え、愛用の万年筆を添えました。以下、陳列した書籍名と出版年を記します。

『楓蔭集』(昭和十二年)・機関誌『愛生』(昭和十二年、十三年)・『新万葉集』(昭和十三年)・歌集『白描』(昭和十四年)・『海人遺稿』(昭和十四年)・『瀬戸の曙』(昭和十四年)・『明石海人全集』上下(昭和十六年)・『日の本の癩者に生れて』(昭和三十一年)・『明石海人全歌集』(昭和五十三年)・『働哭の歌人』(昭和五十五年)

明石海人が宿命のハンセン病による深い苦悩を克

服して文学に打ち込み、やがて、『新万葉集』を契機に、単独歌集『白描』の出版に至る過程と、その後の関係図書の動向を展覧したわけです。

その他の参考書籍は、大テールの上で、自由に閲覧できるようにし、また、車椅子の方に支障のないように動線も工夫致しました。

書簡を展示したケースには、『日本歌人』主宰者前川佐美雄、『小島の春』の著者小川正子、服役の歌人湯浅薫からの親書が、第三のケースには、自筆原稿と日記などが公開され、交友関係、創作過程や人間明石海人の呼吸を堪能していただくように展開しました。

失明に備えて唐詩選、万葉集、子規、左千夫等の歌を、大きな文字で転写したノート類、及び海人の蔵書が置かれたのが第四のケースです。

壁の第一面は、K氏から寄贈された沼商時代の肖像画を掲げ、海人の生涯と文学を五つのポイント(おいたち、発病、長島愛生園、『白描』、ポエジー短歌)に絞ったパネルで紹介しました。

海人自筆の色紙を挿んだ大岡信の連載コラム「折々のうた」の本文は、第二の壁面を引き立て、海人評価の再認識となったことは言うまでもありません。そして、収容時代の長島愛生園と患者の生活を知る貴重な写真で締め括りましたが、全面にパネルや

写真とのハーモニーを考え、『白描』の歌を鑲めた演出も展示の特徴といつてよいでしょう。

出品展示協力者 岡野久代・川口和子・榊原絹江・藤岡武雄・藤巻修一・双見美智子・八十浜俊一・渡辺和彦(敬称略 五十首順)

◆明石海人

一九〇一年(明治三四年)沼津に生まれました。長身のスポーツマンで当時まだ珍しかった真つ赤なオートバイを乗り回し、あふれんばかりの絵や文学の才能をもち、妻とふたりの子に恵まれた一点のかけりもない人生は、らい(ハンセン病)に感染、発病し一転して絶望の淵に突き落とされます。彼は家族と別れ、岡山県にある国立療養所長島愛生園に入所し、わずか数年のうちに数々の優れた短歌を作り、「天才歌人」の名をほしいままにしながら、歌集『白描』一書を残して一九三九年(昭和十四年)三七歳で夭折。『白描』中に次のような歌があります。

父母のえらび給ひし名をすてて

この島の院に棲むべくは来ぬ

海人ばかりでなく多くの人々が、病気になったこと自体ではなく、病気に対する社会の人々の偏見と差別からのがれて、名も出身地も隠したまま一生を終えました。

文化講座(牧水記念館ラウンジ)

十一月七日(出) 六時三十分

朗読の夕べ 伊藤弘子

宮沢賢治「よたかの里」「なめとこ山の熊」